

ヘルスケア・システムとしてのバッチフラワーレメディ その特徴と健康教育的意義

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
丸村 伊世

バッチフラワーレメディとは、不安、怒り、恐れなどさまざまな感情に穏やかに作用し、心の平安とバランスをもたらす癒しの体系である（冨澤，2003）。これは、1936年に英国の高名な医師、細菌学者、病理学者、ホメオパシー医であるエドワード・バッチによって完成された。

本研究では、バッチフラワーレメディを1つのヘルスケア・システムとしてとらえ、バッチフラワーレメディを支える人間観や健康観を学んだことでその人がどう変わったか、その人にとってどのような意味があったのかを考察することを目的とした。

約1時間の非構造化面接を行った。対象としたのは、バッチ国際教育プログラムレベル1を修了し、自分自身の問題に意識的取り組み、実際にバッチフラワーレメディを使用している人、男性2名、女性2名の計4名であった。

それぞれの対象者の逐語録から示唆される、根本問題、信念、エピソード、新たに得られた信念、エドワード・バッチの思想（人間観・治療観・健康観など）やフラワーレメディの体系に関する思い、バッチフラワーレメディについて学んだことによる、心身の健康や人生にとっての意義をふまえ、考察を行った。

結果、4氏に語りから、ヘルスケア・システムとしてのバッチフラワーレメディの特徴、そしてバッチフラワーレメディの健康教育的意義が示唆された。

また、彼らには、長年抱えてきた自分の問題に気付き、その問題と真剣に向き合おうとする姿勢が見られた。そして、今を生き、新たに得た積極的で前向きな思いや信念を持って、未来へ生きて行こうとしている姿が伺えた。